

11月2日(木)~5日(日)開催 2023年度アートウィーク東京
シャトルバス全7ルートや新企画「買える」展覧会 AWT FOCUS
フードが加わり更なる進化を遂げた AWT BAR など
充実のプログラムハイライトを一挙公開！

一般社団法人コンテンポラリーアートプラットフォームは、世界最高峰のアートフェア「アートバーゼル」と提携し、日本の現代アートの創造性と多様性、またそのコミュニティを国内外に紹介する国際的なアートイベント「アートウィーク東京（略称：AWT）」を2023年11月2日（木）-5日（日）の4日間にわたり開催します。**AWT BUS** は、昨年より1ルート増え7ルートで運行。「買える」展覧会 **AWT FOCUS** は、展覧会名を「平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで」とし、64名のアーティストによる100点を超える作品が展示されます。山田^{すずこ}紗子が設計を手掛ける **AWT BAR** では、ミシュラン1つ星のフレンチシェフがフードを提供します。そして、**AWT TALKS** は、シンポジウムとラウンドテーブルを慶應義塾大学にて開催、オンライントークシリーズも新たに3本配信します。



【本リリースの内容】

1. **AWT BUS**の7ルートと各エリアの見どころを紹介。
2. 「平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで」を展覧会名に掲げる「買える」展覧会 **AWT FOCUS**の出展作家を発表。現代アートがより身近に感じられる鑑賞ツアーなどを実施。
3. 建築家・山田紗子が手がける**AWT BAR**では、フレンチレストラン「シンシア」石井真介シェフのフードを提供。建築と食を軸にアートを五感で味わえるコミュニティスペースが誕生。
4. アートの歴史や鑑賞体験への理解を深める**AWT TALKS**。今年度は慶應義塾大学にてシンポジウム&ラウンドテーブルを開催。オンライントークシリーズは新たに3本を配信。
5. 映像作品プログラム**AWT VIDEO**。「ジェンダー」と「自然」をテーマに、思想家・平塚らいてうの自伝からインスピレーションを得て「元始、女性は太陽であった」をタイトルに掲げます。

■ AWT BUSの7ルートと各エリアの今年の見どころ

今年度AWTに参加する、東京の現代アートシーンを牽引する50の美術館やギャラリーや各プログラム会場をつなぐシャトルバス **AWT BUS** のルートが、昨年から1ルート増え、全7ルートに決定しました。

午前10時から午後6時まで約15分おきにバスが巡回し、どなたでも無料で利用できます。

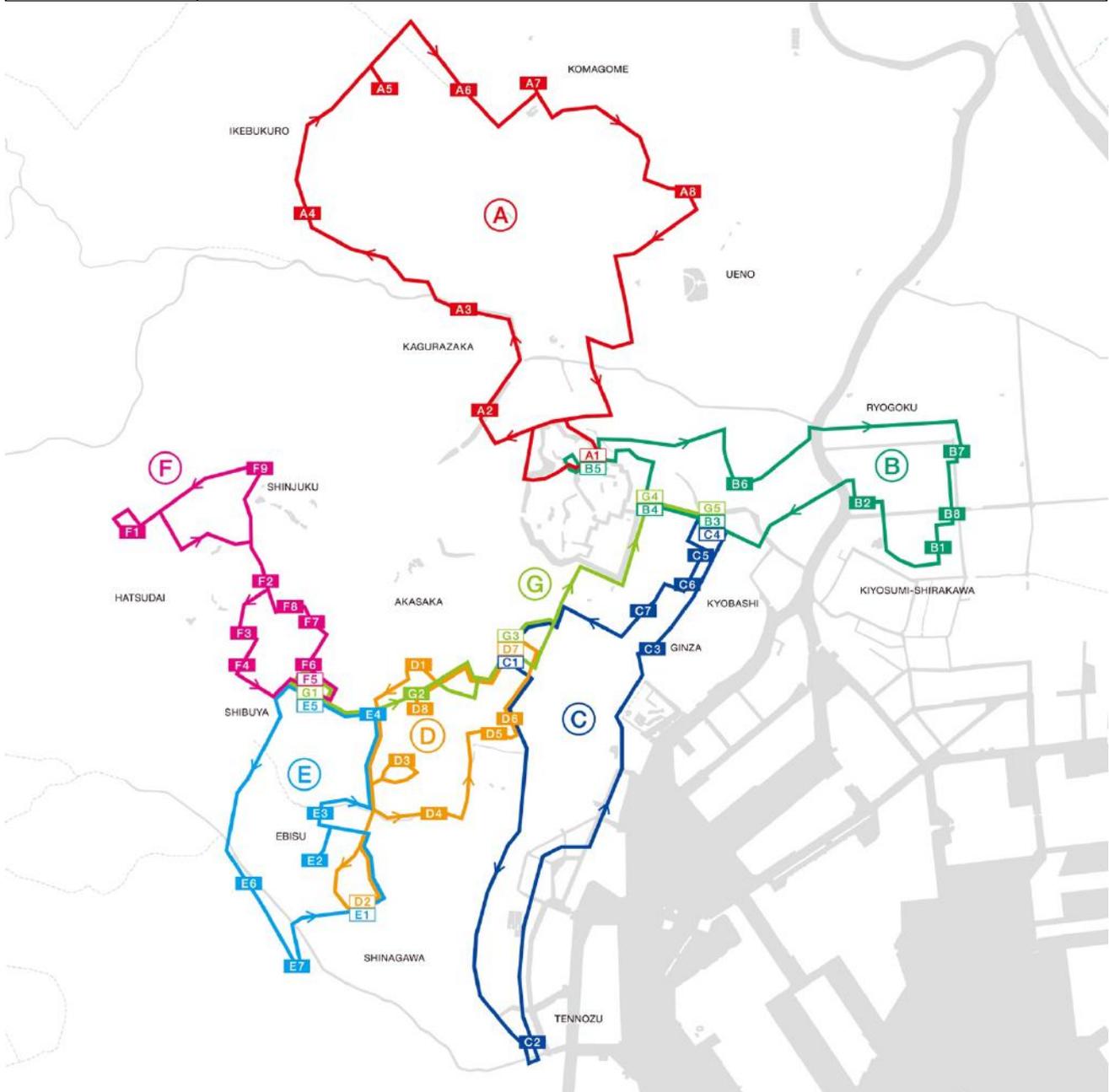
Aルート：東京の北側エリア
東京国立近代美術館（A1/B5：竹橋）を起点とするAルートでは、香川を拠点にペインティングを制作する竹崎和征（A5：ミサコ&ローゼン、大塚）、奈良美智や村瀬恭子といった作家を指導したすぐれた教員としても知られる櫃田伸也（A7：カヨコユウキ、駒込）など、日本人作家の個展に注目です。
Bルート：皇居から東側のエリア
国内で27年ぶりとなるデイヴィッド・ホックニーの大規模な個展（B1：東京都現代美術館、清澄白河）が見逃せません。日本初公開となるiPadで描かれた新作を含む120点余が展示され、ホックニーの世界を体感できる貴重な機会です。
Cルート：銀座エリアから天王洲まで
日常的なオブジェクトを写実的な絵画で描き、テキストと組み合わせた作品を発表する熊谷亜莉沙の個展（C6：ギャラリー小柳、銀座）をはじめ、老舗ギャラリーがひしめく銀座エリアから天王洲までをつなぎます。
Dルート：六本木・麻布エリア中心
モニラ・アルカディリ、ピエール・ユイグ、松澤宥、アピチャップン・ウィーラセタクンなど国内外のアーティスト35名が参加する「私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」（D8：森美術館、六本木）が開催。また、イギリスの映画監督でアーティストのデレク・ジャーマン（D5：タケナガワ、麻布十番）のペインティングと映像作品を展示する回顧展にも注目です。
Eルート：恵比寿・目黒エリアから表参道まで
食文化や植物に関するフィールドワークを行って作品を制作する浅野友理子（E4：スノーコンテンポラリー、六本木）のほか、東京都庭園美術館（E1/D2：目黒）、東京都写真美術館（E2：恵比寿）の2つの美術館や周辺ギャラリーを回ることができます。
Fルート：表参道・原宿エリアから新宿方面へ
19世紀末に日本とトルコの関係性を促進した実業家で茶人でもある山田寅次郎を紹介する展覧会（F7：ワタリウム美術館、外苑前）、韓国における「単色画」の作家のひとりとして知られるハ・ジョンヒョン（F3：プラム&ポー、原宿）の作品を見ることができます。また、沖縄の生活の様子を記録し、人々に密着した写真を撮り続ける石川真生（F1：東京オペラシティ アートギャラリー、初台）は、個展開幕に合わせてアートウィーク東京のオンライントークにゲスト出演します。
Gルート：3つのAWT特設会場と六本木エリアをつなぐ新ルート
アートウィーク東京を効率よく楽しむためにおすすめのルートです。AWT VIDEO（G4/B4：三井住友銀行東館、大手町）、AWT FOCUS（G3/C1/D7：大倉集古館、虎ノ門）、AWT BAR（G1/E5/F5：表参道）での期間限定のプログラムとあわせて、南谷理加（G2：小山登美夫ギャラリー、六本木）や、カンディダ・ヘーファー（G2：コタロウヌカガ、六本木）などの個展も見ることができます。



（画像上から）竹崎和征《untitled》2023年 Photo by Kei Okano. Courtesy Kazuyuki Takezaki and Misako & Rosen./熊谷亜莉沙《You or I》2022年 テキスト：大勢の神様の顔横並べ一つ選んであなたがいい © Arisa Kumagai, courtesy Gallery Koyanagi./石川真生《「大琉球写真絵巻」より 沖縄でバイレイシャル（ミックスルーツ）として生きること》2021年/浅野友理子《庭の脈》2022年/カンディダ・ヘーファー《Biblioteca Palafoxiana Puebla I 2015》2015年 Photo by Osamu Sakamoto./ハ・ジョンヒョン《Conjunction 22-48》2022年 Photo by Ahn Chunho.

AWT BUS

<p>運行期間</p>	<p>11月2日（木）-5日（日） 10:00-18:00 *各バス停を約15分間隔で巡回。 *施設によりバス運行時間と営業時間が異なる場合があります。最新の営業時間は各施設の公式サイトにてご確認ください。</p>
<p>料金</p>	<p>無料 *ご利用の際には、各日の初回乗車時に各バス停または参加美術館に常駐しているAWTスタッフから参加証をお受け取りください。</p>



*バスルート一覧は別添資料を参照。バス停や参加施設の詳細な位置情報はAWTウェブサイトにてご確認ください（<https://www.artweektokyo.com/map/>）。

*全参加施設の展覧会情報は、9月中旬頃にAWTウェブサイトにて公開予定です。

■ 平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで

「買える」展覧会ことAWT FOCUSの出展作家が決定！

現代アートをもっと身近に！子ども向けガイドツアーなど多彩な関連プログラムを展開

本年新たにスタートするプロジェクト **AWT FOCUS** は、キュレーターが美術史的観点から選定した作品を通じて、日本近現代美術のキーワードを再考すると同時に、**展示されるすべての作品はそれぞれの参加ギャラリーを介して購入できる**という企画です。

本年度は、**滋賀県立美術館ディレクター（館長）の保坂健二郎**をアーティストックディレクターとして迎え、**64名のアーティストによる100点を超える作品**を通して、日本の近現代美術を読み解くキーワードを批評的かつ親しみやすい視点から再考する展覧会「**平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで**」を開催します。1917年に実業家の大倉喜八郎によって設立された、現存する日本最古の私立美術館である大倉集古館の地上1・2階および地下1階の3フロアを会場に、物質と非物質、アートとデザイン、自然と人工といった、一見相反する概念の間にバランス（平衡）を求める建設的な緊張関係が、戦後から現代までの日本において新しい表現の誕生を促してきたことを明らかにします。



（画像左から）杉本博司《Opticks 016》2018年 © Hiroshi Sugimoto, courtesy of Gallery Koyanagi./菅木志雄《難空》1975年 Courtesy Tomio Koyama Gallery./田中敦子《作品（題名不詳）》1972年 Courtesy Kotaro Nukaga.

本展では、作家の世代も表現方法もさまざまな作品が展覧されます。1954年に前衛的な画家たちを率いて「具体美術協会（具体）」を結成した**吉原治良**（1905–1972）や、1960年代後半から隆盛した「もの派」の作家に影響を与えた開拓者かつ教育者として知られる**斎藤義重**（1904–2001）など、戦前からの活躍によって日本の美術史の流れをつくった重要人物、そして今後の活躍が期待される**川内理香子**（1990–）や**宮林妃奈子**（1997–）といった新進作家までを、12の章で紹介します。

各章では、アーティストックディレクターが設定するテーマに基づいて、これまでの日本の近現代美術史のダイナミックな再文脈化を試みています。**第7章「自然と人工」**では、もの派を牽引してきた**菅木志雄**（1944–）による物質とそれを取り巻く空間との関係性を現出させるインスタレーションや、写真におけるシュルレアリスム的な表現や構成主義的な表現を追求した**大辻清司**（1923–2001）の作品などを紹介します。**第11章「男のいない抽象」**では、**芥川（間所）紗織**（1924–1966）や**宮本和子**（1942–）などの1960年代から70年代にかけての作品に焦点を当て、当時の女性作家の受容のされ方を見つめ直すとともに、今日の文脈における再評価を試みます。たとえば、宮本の糸と釘を使用したインスタレーションには、具体で活躍した**前川強**（1936–）が麻袋の材料を絵画に用いたことや、**高島依子**（1982–）によるテキスタイルデザインの発想に基づく絵画とも関連性を見出すことができるでしょう。また、いけばなの造形芸術としての新たなあり方を開拓し、草月流を創始した**勅使河原蒼風**（1900–1979）、20世紀を代表するデザイナーの**倉俣史朗**（1934–1991）、建築家の**磯崎新**（1931–2022）など、アートと他のクリエイティブな分野との架け橋となったパイオニアの仕事も紹介します。

展示されるすべての作品は、それぞれの出展ギャラリーを介して購入することができます。本展は、日本の美術史を学ぶうえでの新たな視点を与えるだけでなく、これからアートコレクターを目指す方々にとって、どのように「よきパトロン」になり得るかという長期的なビジョンを描くきっかけとなるでしょう。

会期中には、現代アートがより身近に感じられる多彩な関連プログラムを展開します。**子どもや若者を対象に、作品を観るうえでのヒントをきっかけに自由な発想や創造力を引き出し、美術鑑賞の楽しみ方を伝えるガイドツアー**を実施します。そして、アートコレクターやこれからコレクターを目指す方に向けて、**現代アートコレクションの魅力や作品管理の方法などを学ぶことができるガイドツアー**も実施します。これらのガイドツアーは、AWT FOCUSアーティスティックディレクター・保坂健二郎とNPO法人アーツイニシアティブトウキョウ[AIT/エイト]代表の塩見有子が企画・監修します。

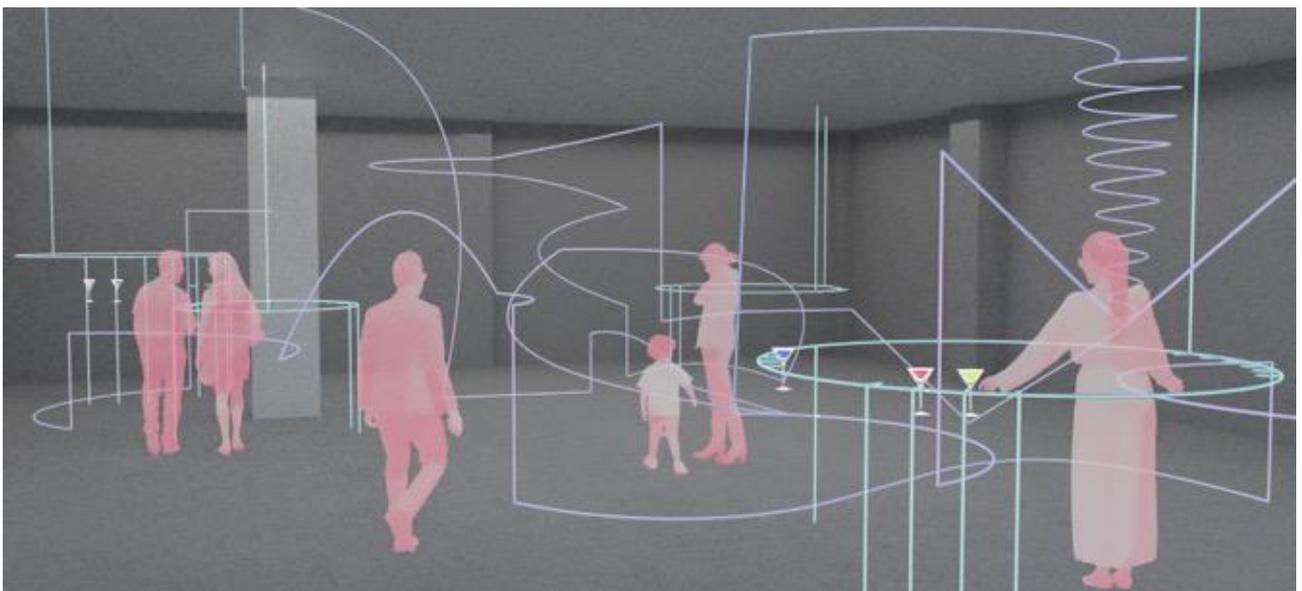
さらに、**小さなお子さま連れの方でも安心してゆっくりとアート鑑賞ができるように、大倉集古館内に託児所を特設**し、専門のスタッフがお子さまをお預かりするサービスを提供します。AWT FOCUSの鑑賞だけでなく、周辺のアートウィーク東京プログラムへ出かける際の利用も可能です。子育て世代が気軽にアートスペースを訪れ、充実した作品鑑賞の時間を過ごすことをサポートします。

* 出展作家一覧、保坂健二郎のプロフィール、関連プログラムの詳細は別添資料を参照。

AWT FOCUS 「平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで」

会期	11月2日（木）-5日（日） 10:00-18:00（最終入場17:30）
会場	大倉集古館（港区虎ノ門2-10-3） AWT BUS [C1][D7][G3]
料金	一般有料、学生・子ども無料 * 大倉集古館の通常のチケットシステムとは異なります。入場料詳細およびチケット購入については別添資料を参照。 * 本展に関して大倉集古館へのお問い合わせはお控えください。 * 託児サービスのご利用は展覧会とは別料金です。

■ 建築家・山田^{すずこ}紗子が手がけるAWT BARでは、フレンチレストラン「シンシア」石井真介シェフのフードを提供。建築と食を軸にアートを五感で味わえるコミュニティスペースがオープン。



© suzuko yamada architects.

AWT会期中、南青山に、気軽に東京のアートコミュニティを体感できる交流の場 **AWT BAR** がオープンします。今年、**建築家・山田紗子**が設計した空間にて、ミシュラン1つ星のフレンチレストラン「**Sincere (シンシア)**」**オーナーシェフ・石井真介**が手がけたフードメニューを提供します。また、AWT参加施設で展覧会を開催するアーティスト、**大巻伸嗣**、**小林正人**、**三宅砂織**の3名とのコラボレーションによるオリジナルカクテルも提供します。

<p>建築</p>	<p>山田紗子・・・2013年に独立して以来、新進建築家の登竜門である第36回吉岡賞を受賞するなど今注目の建築家</p> <p>「ものの外側やその間には空気の流れや滞りがある」と考える山田は、もののアウトラインだけを取り出すアプローチとして、直径13ミリのスチールパイプを用いてこれらを可視化しました。宙に浮かぶラインの内と外を人々が自由に行き交うことができ、バーとしての役割を超えた社交場として機能します。AWT BARの設計に加えて、AWT FOCUSの会場設計も山田が手がけます。</p>
<p>フード</p>	<p>石井真介・・・2016年に千駄ヶ谷に「シンシア」をオープンし、2019年にミシュラン1つ星を獲得</p> <p>今回はAWT BARでのスペシャルメニューとして、日本の風景に着想を得て「森」「海」「山」をテーマに、3皿のフィンガーフードを考案。筒状の生地焼き芋のペーストとスパイスの効いたパンデピスの香りやラム酒をアクセントにした「焼き芋のチュイル」、水産資源を守る取り組みにも力を入れていることから、未利用魚を用いたタルタルとクッキー、レモンオイルやサフランマヨネーズを組み合わせた「消えゆく魚」、フォアグラのムースの中にマスカットのジャムを忍ばせ、カカオバターでコーティングした「マスカットのようなフォアグラ」など、本店のスペシャリテとも異なる限定メニューを堪能できる貴重な機会です。クラシックなフレンチを基盤としながら、食におけるサステナビリティに取り組む石井シェフとのコラボレーションを通じて、未来につながる日本の食文化の創造性を世界に向けて発信します。</p> <p><small>画像手前左から：「海（消えゆく魚&石のようなチョコレート）」、「山（マスカットのようなフォアグラ&甘いどんぐり）」、「森（うさぎの最中&焼き芋のチュイル）」各1皿1,000円</small></p>
<p>カクテル</p>	<p>昨年に引き続き今年も、アーティストの世界観を味わうことができるオリジナルカクテルを提供</p> <p>国立新美術館（D1：六本木）の大空間を活かして新たなプロジェクトを発表する大巻伸嗣、広島を制作拠点とする画家の小林正人（G2：シュウゴアーツ、六本木）、森の中の風景をモチーフにサイアノタイプを用いた新作を発表する三宅砂織（A3：ウェイティングルーム、江戸川橋）の3名とコラボレーションにより生まれたカクテルを、各会場での作品鑑賞とあわせてぜひ体感してみてください。</p> <div data-bbox="347 1675 1142 1995" data-label="Image"> </div> <p><small>画像左から：大巻伸嗣「真空のゆらぎ」、小林正人「この星のレモンカクテル」、三宅砂織「Nowhere in Blue」各1杯1,000円</small></p>

* 山田紗子、石井真介、大巻伸嗣、小林正人、三宅砂織のプロフィール、フードおよびカクテルのメニュー詳細は別添資料を参照。

AWT BAR

会期	11月2日（木）-5日（日） 10:00-24:00（最終入場23:30）
会場	emergence aoyama complex（港区南青山5-4-30） AWT BUS [E5][F5][G1]
料金	入場無料、フードおよびドリンク各種有料

■ アートの歴史や鑑賞体験への理解を深めるAWT TALKS。今年度は慶應義塾大学にてシンポジウム&ラウンドテーブルを実施。新たに3本のオンライントークを配信！



（画像左から）アダム・シムジック © Melanie Hofmann, Zürich./ チュス・マルティネス Photo by Nici Jost./ 保坂健二郎 Photo by Keizo Kioku./ キャロル・インホフ・ルー（盧迎華） Photo by Ohno Ryusuke.

AWT TALKS は、シンポジウム、キュレーターによるラウンドテーブル、オンライントークシリーズから成る、国内外のアートを巡る言説の流れをさまざまな切り口で描き出し、理解と学びを促進するプログラムです。

シンポジウム「エキシビション・エクリチュール：展覧会はいかに語り得るか」		
日時	11月2日（木）10:00-12:30	
会場	慶應義塾大学 三田キャンパス 西校舎ホール	
言語	英日同時通訳	
対象	どなたでも申込可	
定員	800名	
登壇者	アダム・シムジック	AWT VIDEO 2022年 ゲストキュレーター アムステルダム市立美術館 キュレーター・アット・ラーヂ 「ドクメンタ14」（2017年、アテネ・カッセル）芸術監督
	チュス・マルティネス	AWT VIDEO 2023年 ゲストキュレーター 北西スイス応用科学芸術大学附属バーゼル美術インスティテュート ディレクター
	保坂健二郎	AWT FOCUS 2023年 アーティスティックディレクター 滋賀県立美術館 ディレクター（館長）
	キャロル・インホフ・ルー（盧迎華）	美術史家、キュレーター 北京インサイドアウト美術館 ディレクター
モデレーター	アンドリュウ・マークル	AWT エディトリアルディレクター

内容	登壇者4名がそれぞれの「展覧会をつくる」状況を共有しながら、これからの新たな実践に向けた戦略を提案します。前半に各登壇者がテーマに関するプレゼンテーションを行い、後半はグループディスカッションを行います。
申込方法	8月29日（火）より受付開始（事前申込・先着順・参加無料） 申込詳細： https://www.artweektokyo.com/awt-talks/symposium/

ラウンドテーブル「なぜ、アートなのか？」	
日時	11月2日（木）14:00-17:00
会場	慶應義塾大学 三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
言語	英語
対象	キュレーターや評論家およびそれに準ずる職種の方
定員	50名
登壇者	レオナルド・バルトロメウス 山口情報芸術センター[YCAM] キュレーター
	アレクシー・グラス・カントワー アートスペース（シドニー）エグゼクティブディレクター
	ユン・マ ヘイワードギャラリー（ロンドン）キュレーター
	イザベラ・フジェイリ サンパウロ美術館（MASP）キュレーター
モデレーター	帆足亜紀 横浜美術館国際グループ兼学芸グループ グループ長 横浜トリエンナーレ組織委員会 総合ディレクター補佐
内容	さまざまな国や地域を拠点に活動するキュレーターが一堂に会し、今日のアートを巡る喫緊の課題について、「なぜ、アートなのか」という問いに対して率直な意見交換を行います。
申込方法	8月29日（火）より受付開始（事前申込・参加無料） 申込詳細： https://www.artweektokyo.com/awt-talks/roundtable/

2021年から続く**オンライントークシリーズ**では、**新たに3本を配信**予定。アーティスト、キュレーター、批評家などクリエイティブな分野で活躍するさまざまなプロフェッショナルを招き、日本の美術史や文化史のなかで見過ごされてきた潮流や再検証すべき言説を取り上げます。オンライントークシリーズは、オルタナティブなアート教育を担ってきた非営利のグループ、アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT]によって企画されています。

過去のアーカイブも含めて、以下のURLより視聴が可能です（事前登録不要、視聴無料）。

オンライントーク一覧：<https://www.artweektokyo.com/talks/>

配信予定日	配信内容（タイトル、出演者）
9月29日（金）	「 写真家・美術家は何をみたか：日本の写真における実験 1968-1979 」 中森康文（アジア・ソサエティ美術館館長）
10月12日（木）	「 沖縄から撮りつづけること—石川真生の写真 」 石川真生（写真家） *翌日から東京オペラシティ アートギャラリーにて個展を開催。
10月27日（金）	「 ナショナル／インターナショナル／トランスナショナル：戦間期の日本におけるアートと社会の関わり 」 五十殿利治（美術史家、筑波大学名誉教授） アンドリュー・マークル（アートウィーク東京 エディトリアルディレクター）

■ 映像作品プログラム AWT VIDEO。今年は「ジェンダー」と「自然」をテーマに、思想家・平塚らいてうの自伝からインスピレーションを得て「元始、女性は太陽であった」をタイトルに掲げます。

国際的に活躍するキュレーターをゲストに迎え、AWT参加ギャラリーの所属作家の映像作品で構成したプログラムを上映する企画 AWT VIDEO を、昨年に引き続きオフィシャルパートナーのSMBCグループが提供する会場・三井住友銀行東館（B4/G4：大手町）にて実施します。

今回のAWT VIDEOは、哲学と歴史をバックグラウンドに持つ**チュス・マルティネス**がキュレーションします。マルティネスは、日本における女性解放運動の先駆者として明治から昭和にかけて活躍した思想家・平塚らいてうの自伝からインスピレーションを得て、プログラムタイトルを「元始、女性は太陽であった」としました。近年大きな変化を遂げている「ジェンダー」と「自然」の2つをテーマに構成し、さまざまな映像作品のなかに見られる不条理やアバンギャルドなイメージを通して、より良い社会を目指すために不可欠な変革を考察します。本プログラムは3パートで構成され、タイトルに含まれる「太陽」をイメージした形の展示什器で、短編から長編のパフォーマンスを記録したドキュメントまでさまざまな作品を上映します。**岡田裕子**（1970-）、**地主麻衣子**（1984-）、**高田冬彦**（1987-）などの国内作家に加えて、カンボジアの**クウワイ・サムナン**（1982-）、フィンランドの**マイヤ・タンミ**（1985-）、オランダの**シャルロット・デュマ**（1977-）など、多様なバックグラウンドを持つ作家14名を紹介します。

* チュス・マルティネスのプロフィール、出展作家一覧は別添資料を参照。



（画像上から）高田冬彦《Dream Catcher》2018年（ビデオスチル）© Fuyuhiko Takata, courtesy the artist and Waitingroom./森栄喜《シボレスー鼓動に合わせて目を瞬く》2020年（ビデオスチル）© Eiki Mori, courtesy Ken Nakahashi./マイヤ・タンミ《The Problem of the Hydra》2020年（ビデオスチル）© Maija Tammi, courtesy Kana Kawanishi Gallery.

AWT VIDEO 「元始、女性は太陽であった」

会期	11月2日（木）-5日（日） 10:00-18:00
会場	三井住友銀行東館 1階 アース・ガーデン（千代田区丸の内1-3-2） AWT BUS [B4][G4]
料金	無料

■ 開催概要

アートウィーク東京	
名称	アートウィーク東京 欧文：Art Week Tokyo 略称：AWT
会期	2023年11月2日（木）-5日（日）（4日間）10:00-18:00 VIPプレビュー日程：10月31日（火）、11月1日（水）（2日間） *会場やプログラムにより時間が異なる場合があります。
会場	都内50の美術館／インスティテューション／ギャラリー 大倉集古館（AWT FOCUS）、AWT BAR、ほか各プログラム会場
主催	一般社団法人コンテンポラリーアートプラットフォーム

提携	アートバーゼル (Art Basel)			
特別協力	文化庁			
協賛	オフィシャル パートナー	ホテル パートナー	ビバレッジ パートナー	サポーティング パートナー
	SMBCグループ 	オークラ東京 	ルイナール 	Artsy 

アートウィーク東京モビールプロジェクト	
名称	アートウィーク東京モビールプロジェクト
会期	2023年11月2日 (木) -5日 (日) (4日間) 10:00-18:00
主催	東京都／アートウィーク東京モビールプロジェクト実行委員会

<p>「アートウィーク東京」とは</p> <p>東京における現代アートの創造性と多様性を国内外に発信する年に一度のイベントである「アートウィーク東京」は、文化庁の協力のもと、世界有数のアートフェアである「アートバーゼル」と提携し、一般社団法人コンテンポラリーアートプラットフォームが主催。東京都、アートウィーク東京モビールプロジェクト実行委員会と連携し、都内の主要アートスペースをつなぐ交通手段の提供など幅広い鑑賞者層に対してアートアクティビティの体験機会を創出する「アートウィーク東京モビールプロジェクト」を通じて、東京の現代アートを支える環境基盤の形成に努めている。</p> <p>パンデミック下における2021年に初開催となったアートウィーク東京は、訪日外国人観光客の受け入れが始まった2022年に規模を拡大する形で開催し、美術館やギャラリーなど51のアートスペースが参加。2022年度は、4日間にわたる会期を通じてのべ3万2,000人を超える参加者を記録。アートウィーク東京モビールプロジェクトの一環として運行した無料のシャトルバス「AWT BUS」は、会期中の午前10時から午後6時の間に約15分おきに特設のバス停を巡回した。また、気鋭の建築家・萬代基介の設計による「AWT BAR」をナイトアウトプログラムとして南青山にオープン。4名のアーティストとのコラボレーションによるオリジナルカクテルを提供し、日中アート鑑賞を楽しんだ人々が、夜に集う憩いの場として賑わいを見せた。</p>
<p>「アートウィーク東京モビールプロジェクト」とは</p> <p>東京都とアートウィーク東京モビールプロジェクト実行委員会が主催。アートウィーク東京の会期中に、都内各地に広がる主要なアートスペースを繋ぐ「AWT BUS」の運行や、子どもや若者、将来のコレクターなどを対象とする展示会のガイドツアーやセミナーを展開するほか、国内外のキュレーターを招聘したシンポジウムなどを開催し、幅広い鑑賞者層に対してアートアクティビティの体験機会を創出。国内のアートに対する関心の裾野拡大を目指す。実行委員は、片岡真実（森美術館館長）、小松弥生（東京国立近代美術館館長）、塩見有子（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT]理事長）、蜷川敦子（アートウィーク東京ディレクター／一般社団法人コンテンポラリーアートプラットフォーム代表理事）、茂木直恵（東京都現代美術館副館長）。</p>
<p>「アートバーゼル」とは</p> <p>世界最高の規模と質を誇る近現代美術のアートフェア「アートバーゼル」。毎年、拠点となるスイスのバーゼルをはじめ、香港、マイアミビーチ（アメリカ）、パリで開かれるアートフェアには、世界各地から大勢のアートファンや専門家が集まる。国際的なアートイベントにおける高度な専門知識や経験を有するアートバーゼルは、アートウィーク東京が目指す現代アートの健全で活発なエコシステムの構築や、国際的なネットワークにおける東京の地位を確立するために欠かせない存在と言える。</p>

公式サイト：https://www.artbasel.com/

www.artweektokyo.com



【本件に関する報道関係者のお問い合わせ先】

「アートウィーク東京」PR 事務局

担当：金子（070-3197-6111）、石曾根（080-7371-1722）、楠

Email：awt_pr@ssu.co.jp

【別添資料】

1. AWT BUS ルート一覧
2. AWT BAR メニュー
3. AWT FOCUS 出展作家一覧
4. AWT FOCUS 入場料
5. AWT FOCUS 関連プログラム
6. AWT VIDEO 出展作家一覧
7. 関係者プロフィール

■ AWT BUS ルート一覧

Aルート：東京の北側エリア

- A1/B5：東京国立近代美術館（竹橋）
- A2：ミヅマアートギャラリー（飯田橋）
- A3：ウェイティングルーム（江戸川橋）
- A4：タリオンギャラリー（目白）
- A5：フィギュア／ミサコ&ローゼン（大塚）
- A6：フォーシックスフォーナイン（巣鴨）
- A7：カヨコユウキ（駒込）
- A8：スカイザバスハウス（根津）

Bルート：皇居から東側のエリア

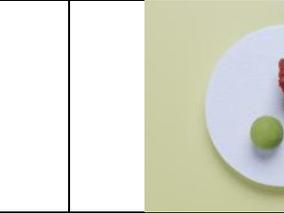
- B1：東京都現代美術館（清澄白河）
- B2：ハギワラプロジェクト（清澄白河）
- B3/C4/G5：B⇔C⇔G乗り換え地点（日本橋交差点付近）
- B4/G4：AWT VIDEO（三井住友銀行東館、大手町）
- B5/A1：東京国立近代美術館（竹橋）
- B6：タグチファインアート（日本橋）
- B7：無人島プロダクション（錦糸町）
- B8：カナカワニシギャラリー（清澄白河）

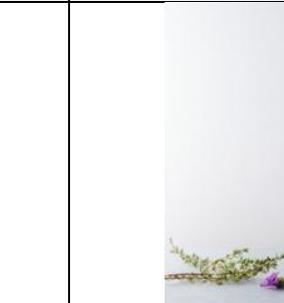
Cルート：銀座エリアから天王洲まで

- C1/G3/D7：AWT FOCUS（大倉集古館、虎ノ門）
- C2：コウサクカネチカ（天王洲）
- C3：資生堂ギャラリー／東京画廊＋BTAP（銀座）

<p>C4/B3/G5：B⇄C⇄G乗り換え地点（日本橋交差点付近）</p> <p>C5：アーティゾン美術館（京橋）</p> <p>C6：ギャラリー小柳（銀座）</p> <p>C7：銀座メゾンエルメス フォーラム（銀座）</p>
<p>Dルート：六本木・麻布エリア中心</p>
<p>D1：国立新美術館／日動コンテンポラリーアート（乃木坂）</p> <p>D2/E1：東京都庭園美術館（目黒）</p> <p>D3：カイカイキキギャラリー（広尾）</p> <p>D4：ミサシギャラリー（広尾）</p> <p>D5：タケニナガワ（麻布十番）</p> <p>D6：PGI（麻布十番）</p> <p>D7/C1/G3：AWT FOCUS（大倉集古館、虎ノ門）</p> <p>D8：森美術館（六本木）</p>
<p>Eルート：恵比寿・目黒エリアから表参道まで</p>
<p>E1/D2：東京都庭園美術館（目黒）</p> <p>E2：東京都写真美術館（恵比寿）</p> <p>E3：MEM（恵比寿）</p> <p>E4：スノーコンテンポラリー（六本木）</p> <p>E5/F5/G1：AWT BAR（表参道）</p> <p>E6：ポエティック・スケープ（中目黒）</p> <p>E7：リーサヤ（不動前）</p>
<p>Fルート：表参道・原宿エリアから新宿方面へ</p>
<p>F1：東京オペラシティ アートギャラリー（初台）</p> <p>F2：ギャラリー38（原宿）</p> <p>F3：ブラム&ポー（原宿）</p> <p>F4：ルイナール（バンクギャラリー、表参道）</p> <p>F5/E5/G1：AWT BAR（表参道）</p> <p>F6：ファーガス・マカフリー（表参道）</p> <p>F7：ワタリウム美術館／マホクボタギャラリー（原宿）</p> <p>F8：ナンヅカアンダーグラウンド（原宿）</p> <p>F9：ケンナカハシ（新宿）</p>
<p>Gルート：3つのAWT特設会場と六本木エリアをつなぐ新ルート</p>
<p>G1/E5/F5：AWT BAR（表参道）</p> <p>G2：オオタファインアーツ／コタロウヌカガ／小山登美夫ギャラリー／シュウゴアーツ／タカ・イシイギャラリー／タロウナス／ペロタン東京／ユタカキクタケギャラリー／ユミコチバアソシエイツ（六本木）</p> <p>G3/C1/D7：AWT FOCUS（大倉集古館、虎ノ門）</p> <p>G4/B4：AWT VIDEO（三井住友銀行東館、大手町）</p> <p>G5/B3/C4：B⇄C⇄G乗り換え地点（日本橋交差点付近）</p>

■ AWT BAR メニュー

フード 2品1皿、各1,000円 (予定)		
森 うさぎの最中 焼き芋のチュイル	海 消えゆく魚 石のようなチョコレート	山 マスカットのようなフォアグラ 甘いどんぐり
		

カクテル 各1,000円 (予定)		
大巻伸嗣 真空のゆらぎ	小林正人 この星のレモンカクテル	三宅砂織 Nowhere in Blue
		

■ AWT FOCUS 出展作家一覧

会田誠／青木陵子／芥川（間所）紗織／石川順恵／石塚源太／磯崎新／伊藤久三郎／伊藤義彦／井上有一／今井祝雄／上田勇児／植松永次／鶺鴒結一朗／O JUN／大竹伸朗／大竹利絵子／大辻清司／大西茂／大庭大介／岡本信治郎／小川待子／沖潤子／桂ゆき／川内理香子／金光男／倉俣史朗／黒田辰秋／桑田卓郎／小林正人／斎藤義重／篠田太郎／菅木志雄／菅井汲／杉全直／杉本博司／高橋銃／高島依子／田中敦子／鳥海青児／勅使河原蒼風／戸谷成雄／中西夏之／長谷川寛示／八田豊／浜名一憲／比田井南谷／福島秀子／堀浩哉／堀内正和／前川強／松下真理子／南川史門／宮林妃奈子／宮本和子／三輪美津子／元永定正／モリマサト／八木一夫／山口長男／山崎つる子／楊博／吉原治良／吉増剛造／李禹煥

*64作家、姓の50音順

■ AWT FOCUS 入場料

展覧会詳細・チケット購入情報：<https://www.artweektokyo.com/focus/>

	平日 11月2日 (木)	土・日・祝日 11月3日 (金) -5日 (日)	
入場時間区分	10:00-17:30	10:00-11:00	11:00-17:30
一般	2,000円 [1,800円]	2,000円 [1,800円]	2,200円 [2,000円]
学生・子ども	無料	無料	無料
ペア	[3,400円]	[3,400円]	[3,800円]

*[]は前売り料金。前売りチケットは11月1日（水）まで販売します。

*表示料金は消費税込み。

*同日に限りチケットの提示により再入場が可能です。

*学生の方は身分証などをお持ちください。

*障がい者手帳をお持ちの方とその介助者（1名まで）は無料です。

*大倉集古館ミュージアムパスポート、オークラ東京のレストランセット鑑賞券、ぐるっとパスをお持ちの方はご利用いただけます。

■ AWT FOCUS 関連プログラム

展覧会鑑賞ツアー	
日程	11月3日（金）-5日（日）
会場	大倉集古館（港区虎ノ門2-10-3）
アートコレクターを目指す方向け	
対象	アートコレクターまたはコレクションに興味がある方（言語は日本語のみ）
定員	各回10人程度（計40人程度）（予定）
子ども・若者向け	
対象	①6-9歳 ②10-12歳 ③13-18歳（言語は日本語のみ）
定員	各回10人程度（計80人程度）（予定）

*お申し込みは9月末頃からAWTウェブサイトです受付開始予定（事前申込制、抽選、参加無料）

託児サービス	
日程	11月2日（木）-5日（日）
会場	大倉集古館（港区虎ノ門2-10-3）B1F
時間	10:00-17:45、1回3時間まで
対象	生後6か月以上6歳以下の乳幼児（日英バイリンガル対応）
定員	同時に5人前後
利用料金	①1時間未満：無料 ②1時間以上3時間未満：1時間につき1,000円/人 ③3時間以上：30分毎に追加料金500円/人
定員	各回10人程度（計80人程度）（予定）

*お申し込みは9月末頃から専用フォームです受付開始予定（事前申込制、先着順）

■ AWT VIDEO 出展作家一覧

岡田裕子／利部志穂／笹本晃／クゥワイ・サムナン／地主麻衣子／清水裕貴／高田冬彦／田口行弘／W HIRO KO Project（伊藤弘子 × 岡田裕子）／シャルロット・デュマ／マイヤ・タンミ／葉山嶺／布施琳太郎／森栄喜

*14作家、姓の50音順

■ 関係者プロフィール

保坂健二郎（ほさか・けんじろう）



Photo by Keizo Kioku

滋賀県立美術館ディレクター（館長）。1976年生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了後、2000-20年まで東京国立近代美術館（MOMAT）に学芸員として勤務、2021年より現職。MOMATで企画・担当した主な展覧会に「建築が生まれるときペーター・メルクリと青木淳」「エモーショナル・ドローイング」（以上、2008年）、「建築はどこにあるの？7つのインスタレーション」（2010年）、「イケムラレイコうつりゆくもの」（2011年）、「フランシス・ベーコン展」（2013年）、「現代美術のハードコアはじつは世界の宝であるヤゲオ財団コレクションより」（2014年）、「声ノマ全身詩人、吉増剛造展」（2016年）、「日本の家1945年以降の建築と暮らし」（2017年）、「隈研吾展新しい公共性をつくるためのネコの5原則」（2021年）など。「DoubleVision: Contemporary Art from Japan」（2012年、モスクワ市近代美術館ほか）、「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」（2014年、ハウス・コンストラクティヴほか）、「The Japanese House: Architecture and Life after 1945」イタリア国立21世紀美術館（2016年、ローマ）など国外での企画にも携わる。公益財団法人大林財団「都市のヴィジョン」推薦選考委員、文化庁文化審議会文化経済部会アート振興ワーキンググループ専門委員なども務める。

山田紗子（やまだ・すずこ）



1984年東京都生まれ。大学在学時にランドスケープデザインを専攻。卒業後は藤本壮介建築設計事務所では建築を学び、その後東京藝術大学大学院に進学（美術研究科建築専攻）。在学時に東京都美術館主催「Arts & Life: 生きるための家」展で最優秀賞を受賞し、原寸大の住宅作品を展示する。独立後の主な仕事として、屋内外を横断する無数の構造材によって一体の住環境とした「daita 2019」、形や色彩の散らばりから枠にとられない生活を提案した「miyazaki」等の住宅作品や、樹木群と人工物が渾然一体となる環境を立ち上げる2025年大阪関西万博休憩施設（2025年公開）などがある。近年の主な受賞に第3回日本建築設計学会賞大賞、第36回吉岡賞、Under 35 Architects exhibition 2020 Gold Medal、2022年日本建築学会作品選集新人賞など。

石井真介（いしい・しんすけ）



「オテル・ド・ミクニ」「ラ・ブランシュ」などを経て渡仏。帰国後は「レストランバカール」を渋谷に立ち上げ、予約数年待ちの人気フレンチ店となる。現在は、2016年のオープン以来、連続でミシュラン1つ星を獲得している「Sincere（シンシア）」のオーナーシェフでもあり、2023年に開業した日本ハム球場を抱える北海道ボールパークFビレッジの大注目メインダイニング「シンシアN°」も手掛けている。さらに、「一般社団法人Chefs for the Blue」のリードシェフを務めるなど、サステナブルシーフードの普及にも力を入れており、これらの活動が認められ、ミシュラングリーンスターを獲得した。独創的でアートのように美しく健康的。日本愛に溢れ、自然に配慮し、食べる人を幸せにする料理が国内外からも注目される、日本を代表するフレンチシェフのひとり。

大巻伸嗣 (おおまき・しんじ)



Photo by paul barbera / where they create

岐阜県出身。「存在」とは何かをテーマに制作活動を展開する。環境や他者といった外界と、記憶や意識などの内界、その境界である身体の関係性を探り、三者の間で揺れ動く、曖昧で捉えどころのない「存在」に迫るための身体的時空間の創出を試みる。

主な個展に、「存在のざわめき」関渡美術館 (2020年、台北)、「まなざしのゆくえ」ちひろ美術館 (2018年、東京)、「Liminal Air Fluctuation-existence」Hermèsセーヴル店 (2015年、パリ)、「存在の証明」箱根彫刻の森美術館 (2012年、神奈川) など。「あいちトリエンナーレ」 (2016年)、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」 (2014年、新潟)、「アジア・パシフィック・トリエンナーレ」 (2009年、クイーンズランド)、「横浜トリエンナーレ」 (2008年、神奈川) などの国際展にも多数参加。近年は横浜ダンスコレクション「Futuristic Space」横浜赤レンガ倉庫 (2019年、神奈川)、「Louis Vuitton 2016-17FW PARIS MEN'S COLLECTION」アンドレシトロエン公園 (2016年、パリ) など舞台やパフォーマンスでも作品を発表する。2023年には「地平線のゆくえ」弘前レンガ倉庫美術館 (10月9日まで、青森)、「Depth of Light」A4美術館 (11月18日まで、成都) が開催中のほか、国立新美術館 (11月1日から、東京) でも個展を開催予定。

小林正人 (こばやし・まさと)



1957年、東京生まれ。1996年サンパウロビエンナーレ日本代表。1997年ヤン・フォート氏に招かれ渡欧、以降ベルギー・アントワープ市を拠点に各地で現地制作を行う。2006年に帰国、福山市・鞆の浦を拠点に制作を続ける。絵の具をチューブから直接手にとり、カンヴァスの布地を片手で支えながら擦り込むようにして色を載せ、同時に木枠に張りながら絵画を立ち上げていくというまったく独自の手法を用いて、絵画の在り方を探究し続ける。主な個展に「この星の家族」シュウゴアーツ (2021年、東京)、「画家とモデル」シュウゴアーツ (2019年、東京)、「ART TODAY 2012 弁明の絵画と小林正人」セゾン現代美術館 (2012年、長野)、「この星の絵の具」高梁市成羽美術館 (2009年、岡山)、「STARRY PAINT」テンスタコンストハーレ (2004年、ストックホルム)、「A Son of Painting」S.M.A.K (2001年、アントワープ)、「小林正人展」宮城県美術館 (2000年、宮城) など。著作に『この星の絵の具 [上] 一橋大学の木の下で』 (2018年、アートダイバー)、『この星の絵の具 [中] ダーフハウス通り52』 (2020年、アートダイバー)。

三宅砂織 (みやけ・さおり)



1975年、岐阜県生まれ。京都在住。主な個展に、「アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.9三宅砂織」岐阜県美術館アトリエ (2021年、岐阜)、「庭園 | P OTSDAM」SPACE TGC (2019年、東京)、「THE MISSING SHADE 3」WAITING ROOM (2018年、東京)、「THE MISSING SHADE 2」SAI GALLERY (2017年、大阪) など。主なグループ展に、「ミラーレス・ミラー」gallery αM (2022年、東京)、「奥能登国際芸術祭2020+最涯の芸術祭、美術の最先端。」石川県珠洲市全域 (2021年、石川)、「MOTアニュアル2019 Echo after Echo: 仮の声、新しい影」東京都現代美術館 (2019年)、「第20回 DOMANI・明日展」国立新美術館 (2018年、東京) など。

チルス・マルティネス (Chus Martínez)



Photo by Nici Jost

スペイン出身。北西スイス応用科学芸術大学付属バーゼル美術インスティテュート所長。イスタンブールのヴスラット財団でキュレーター統括としても活動中。これまで、エル・ムセオ・デル・バリオ（ニューヨーク）のチーフキュレーター、「ドクメンタ13」（2012年、カッセル）の部門長、バルセロナ現代美術館（MACBA）のチーフキュレーター、フランクフルト芸術協会のディレクター、salarekalde（ビルバオ）のアーティスティックディレクターなどを務める。近年キュレーションした代表的な企画に「Livingin Joy」アートソングェセンター（2023年、ソウル）など。

END